

時間と場所の情報を有する 大量の写真資料の提示法

A Showing Method for Large Amount of Photographs Having
Temporal and Spatial Information

安達文夫・青山宏夫・田中紀之・徳永幸生

ADACHI Fumio, AOYAMA Hiro'o, TANAKA Noriyuki and TOKUNAGA Yukio

①はじめに

②提示方法

③利用記録による分析

④提示法の評価と考察

⑤むすび

【論文要旨】

博物館の所蔵資料には、あるまとまりを以て資料群をなすものがある。この中には数千から数万の資料で構成されるものがある。また、文献資料では、その書面が10万におよぶものがある。このような大量の資料画像を公開するには、利用者が探そうとする画像の候補を効果的に提示することが大きな課題となる。

国立歴史民俗博物館で寄贈を受けた地理学者石井實が戦後全国各地の風景を撮影した30万コマを超える写真からなる石井實フォトライブラリを主たる資料の一つとした企画展示「風景の記録」を開催した。これを機会として、大量の画像の効果的な提示方法の手掛かりを得ることを目的に、同コレクションのデジタル化が終了した34,000点の写真を対象とする提示システムを構成し、展示で公開した際に収集した利用記録を分析することにより、提示方法の評価を行った。同コレクションには、撮影日と撮影地の記録が撮影の単位毎に残されている。この単位をサブフィルムとし、場所または時間の情報を基にサブフィルムを絞り込み、見たい写真を閲覧する方法で提示システムを構成した。

利用記録の分析により、以下が明らかになった。利用者が探す写真の候補をサムネイル画像の一覧で提示するとき、表示の最大画像数を大きくするとサムネイルが小さくなりその選択に影響を与えることが懸念されるが、最大画像数が40程度なら、影響を受けない。最大画像数を大きくすると場所を選択する平均画面操作数が少なくなり、全体としてのアクセス率が高まる。場所による探索と時間による探索では、前者が3倍ほど多い。閲覧される場所は利用者の生活する地域に関連している。利用者が自らの視点で写真を探している表である。写真の閲覧において、写真一覧から一つづつ選ぶ利用者と、写真表示画面に入って次々に見る利用者の割合は、概ね半々である。但し、閲覧される画像は後者が多い。

【キーワード】画像閲覧、展示システム、博物館資料、風景写真、ログ分析